

氏 名 めーていーびたっくていーらだむ
MAYTHEE PITAKTEERADHAM
 学位の種類 博士（文学）
 学位記番号 甲第83号
 学位授与の日付 2010年9月30日
 学位授与の要件 学位規程第3条第1項
 学位論文題目 有我・無我の対論におけるプドガラ説
 ——犢子部・正量部を中心として——

論文審査委員（主査）大谷大学教授
 博士（文学）[大谷大学] 兵 藤 一 夫
 （副査）大谷大学教授 宮 下 晴 輝
 （副査）佛教大学教授
 博士（文学）[佛教大学] 並 川 孝 儀

学位請求論文審査要旨

I. 論文内容の要旨

本論文は、仏教内の有我論とも見まがう犢子部・正量部のプドガラ説の内容を、無我論との対論の中で明らかにしようとするものである。これまでプドガラ説を詳しく取り上げた先行研究は多くはなく、十分に明らかにされているとは言えない。基礎資料となる文献は、犢子部・正量部自身の論書としては漢訳にのみ伝えられる『三弥底部論』と、チベット訳にのみ伝えられる『有為無為決択』が現存している。その中、前者は正量部のプドガラ説の基礎資料となるものであるが、論述が簡潔すぎたり漢文が難解なこともあり、これだけで正量部のプドガラ説を明らかにすることは困難であり、これまでも十分に研究はなされていない。また、後者にはプドガラ説はほとんど言及されていないため、その直接的な資料にはなり得ない。一方で、犢子部・正量部のプドガラ説は無我を根本教説とする仏教内で強く批判されたため、他

の部派の論書の中で取り上げられ議論されている場合も多い。中でも、『論事 (*Kathāvatthu*)』、『識身足論』、『俱舍論』「破我品」では相当詳しく議論されているので、犢子部・正量部のプドガラ説を考察するには不可欠な文献であろう。

そのような状況の中で、本論文は、先ず、他部派の論書においてなされるプドガラ説に関する対論を通して、プドガラ説を明らかにしようとする。その際、資料とするのは、前述の『論事』とその注釈、『識身足論』、そして『俱舍論』「破我品」である。

本論文の構成と内容は次のとおりである。

序論

第一章 犢子部の成立と名称について——舍利壺に刻まれている諸聖者あるいは伝道師名に基づく——

第1節 *Kathāvatthu* に見られる上座部内の派閥 (グループ)

第2節 舍利壺に刻まれている諸聖者あるいは伝道師の名称

第二章 仏教内における有我論師・無我論師の対論

第1節 『論事 (*Kathāvatthu*)』におけるプドガラ説

第2節 『識身足論』におけるプドガラ説

第三章 『俱舍論』「破我品」における世親のアートマン批判

第1節 「破我品」の成立過程

第2節 世親のアートマン批判

結論

Appendix 1, 2, 3

副論文 『俱舍論』「破我品」の翻訳研究

その中、第一章では、犢子部の成立について論じられる。従来の『異部宗輪論』などの文献資料だけでなく、伝道師派遣の伝説と舍利壺に刻まれた聖者名を手がかりに、仏教部派の成立や名称が考察されている。仏教における

部派分裂は、これまで教義や律の解釈の違いにその主要因を見ようとしてきたが、教団が広い地域に拡大発展するにつれて、地理的・地域的な特徴をもつに至ったことも看過できないことである。伝道師の派遣という事態は、そのような文脈の中で考えられるべきであろう。本論文はそのような視点を持って伝道師の派遣伝説を捉えて、Mogaliputa (Moggaliputta-tissa) によって地方に伝道師が派遣されたこと、伝道師とされた高僧たちと舍利壺に刻まれる高僧名とを比較・同定して、Kāsapagota, Vāchiputa, Mahādeva, Madhyāntika, Dhammarakkhita, などの高僧が伝道師として各地域の教団の指導・発展に大きな役割を果たしたことを論ずる。彼ら伝道師たちは、Moggaliputta-tissa が主導する第三結集(仏滅後400年頃)までは同じ「上座」であったが、結集後、公的にそれぞれに部派名が称せられるようになり、Vāchiputta が指導するグループは犢子部 (Vātsīputrīya) という部派名で呼ばれ、これは指導者の名に由来するものであろう。

第二章では、先ず『論事』の Puggalakathā におけるブドガラ説を巡る犢子部・正量部と上座の議論がブッダゴーサの注釈に基づきながら紹介される。犢子部・正量部の見解の主なものは次のようである。(i) ブドガラは五蘊などとは別に諦義・勝義として存在するが、五蘊などの根本存在と同じであるとも別であるとも言うべきでない、(ii) ブドガラは業の主体者・業果の享受者である、(iii) 諦論者・真実論者としての世尊のことば(経文)によってブドガラは実在する、などである。それに対して、上座はブドガラ説を批判するが、その批判の仕方は対論者の見解が經典と矛盾することを指摘する、いわゆる帰謬論的な方法であり、その要点は次のようである。(i) ブドガラが色蘊などと同じように諦義・勝義として存在するならば、色蘊と受蘊などが別な法であるように、ブドガラと色蘊などとは別な法でなければならない、(ii) 諦義・勝義として存在するものは有為・無為の諸法であるから、ブドガラも有為か無為でなければならない、有為でも無為でもないものは実在しない、(iii) 諦論者・真実論者としての世尊のことば(経文)によって、一切法は無常・無我・空であり、ブドガラは存在しない、である。そして、両者が

論拠(教証)として用いる経文の引用元(經典名)を明らかにしている。

次に、『識身足論』『補特伽羅蘊』におけるブドガラ説を巡る議論が紹介される。補特伽羅論者の見解の主なものとは次のようである。(i) ブドガラは諦義・勝義として認識され、実有である、(ii) ブドガラは輪廻において趣の形で転生する主体である、(iii) 聖者の位(四双八輩)の如きの修行階梯において主体であるブドガラは存在する、(iv) 有為も認識され、無為も認識され、ブドガラも認識される、などである。性空論者は、これら補特伽羅論者の見解に対して、主として経文に基づきながら帰謬論的に批判する。(i) 經典に基づいて、五趣においても、修行階梯においても、通じて同じ主体であるブドガラは存在しないことを示す、(ii) 經典に基づいて、ブドガラが実有であれば業の作者とその業果の受者に関して不合理が生ずることを示す、(iii) 「有為も得ることができる、無為も得ることができる、ブドガラも得ることができる」という補特伽羅論者の見解に対して、存在するものは有為・無為二つだけであるとの世尊のことは(教証)により、その二つ以外の存在であるブドガラを認めない、などである。『識身足論』では、両者にとって經典のことはが最重要な論拠となっているが、それらが經典名と共に本章の最後にまとめられている。

第三章では、『俱舍論』『破我品』における犢子部のブドガラ説とそれに対する世親の批判が取り上げられる。まず、犢子部のブドガラについての見解の主なものは次のようである。(i) 薪によって火が仮説されるように、現在の諸蘊によって実体としてのブドガラは仮説される、(ii) ブドガラは不可説の所知として実在する、(iii) 「化生の有情は存在しないというのは邪見である」という經典に基づいてブドガラは存在する、などである。これに対する世親の批判は、二種の正しい認識手段(量)、すなわち直接知覚(現量)と推理(比量)、を念頭に置いたきちんとした論証の形をとっている。ブドガラは、色などの六境の如く六識によって直接知覚できず、眼根などの五根の如く推理によっても認識できないから存在しないと述べる。そして、続いて、ブドガラを(i) 実体とすること、(ii) 不可説な所知とすること、(iii) 六識と

もによって認識されとすること (iv) 経典(聖言量)に基づくこと, などについて問答をしながら批判し, 論証をより完全なものにしているのである。

世親は, プドガラ実有説批判の一環として, 一応, 経典を認識手段の一つである聖言量として使用しているが, 現量や比量と同等なものとは見ていないようである。

II. 論文審査結果の要旨

本論文は, 犢子部・正量部のプドガラ説について, 他部派の文献において批判的に取り上げられている主要な部分, 『論事』とその注釈, 『識身足論』, そして『俱舍論』『破我品』それぞれを丹念に読解してその議論を項目ごとに分けて考察することを通して, これまで十分に明らかにされていなかったプドガラ説の内実(内容と論拠), 対論者の立脚点と批判の仕方を明らかにしていることは評価し得るであろう。ただ, それぞれの論書において明らかにされた内容が論書間において互いに比較検討することに関しては不十分な点が多い。それぞれの論書に見られるプドガラ説の共通点と相違点を取り出したり, 批判の仕方の変遷を見るなど, もう少し突っ込んだ考察があればと惜しまれる。

一般には, 一方の側(無我論の立場)から批判対象としてのプドガラ説を取り出し, それを犢子部・正量部のプドガラ説とすることには慎重でなければならないが, 今回取り上げられた文献のように, 双方の見解がかなり詳しくやり取りされている場合は, それぞれの立場がよりはっきりと見えるので, 返ってプドガラ説の内容が明らかにできるということもあり, 本論文の意義は認められる。ただ, 本論文では少ししか言及されていないが, 『三弥底部論』のプドガラ説を取り上げ, それと関連づけて考察することが必要であることを忘れてはならないであろう。以下, 論文の内容に沿ってその評価の幾つかを具体的に述べておく。

第一章では, 犢子部の成立と名称について, 伝道師派遣の伝説と舍利壺に刻まれた聖者名を手がかりに, 仏教部派の成立や名称を考察することはおも

しろい着眼である。第三結集まではグループや地方の僧団に止まっていたものが、結集以後、部派名を持って分立するようになること、その際、舍利壺に刻まれた高僧たちが大きな役割を果たし、その一人である Vāchiputta が犢子部の指導者であり部派名は彼に由来するというこの結論は、論証は不十分な点もあるが、その可能性は高いであろう。

第二章と三章については、全体的な評価は先に述べたので、ここでは個別的に気づいたことを摘記しておく。『論事』に関しては、ブッダゴーサの註釈を踏まえて議論の内容や展開を明らかにしていること、教証として引用される経文の出典を調べていることは、議論の背景を踏まえて理解することから評価できる。しかし、教証として引用される経文は、対論者双方ともに經典としては認めるが、それを文字通りに理解して、議論は平行線のままで終わっているのが、『論事』の特徴であり、經典に対して批判的態度は見られないことは指摘すべきであろう。『識身足論』でも、教証としての経文の出典を明らかにしていることは評価できるが、『論事』と異なって、ここでは経文の解釈にまで踏み込んだやりとりが見られることは指摘しておくべきであろう。

第三章の最初で、「破我品」の品名について言及しているが、最近の研究を批判して品名を pudgalavādapraṭiṣedha とすることは妥当であろう。また、『論事』や『識身足論』とは違って、世親は無我であることを正しい認識手段、特に現量と比量、を用いてきちんと論証しようとしているとの指摘は重要である。その場合、聖言量の取り扱いが焦点になるが、このことは第二章の『論事』と『識身足論』での教証の取り扱いと比較することから、時代とともに經典の位置付けが変化していることが見られる。このことはもっとはっきりと論じるべきであろう。

結論は各章のまとめを再録しただけになっているが、もう少し工夫がいるであろう。例えば、まとめの中で重要なことのみをさらに要約して、本論文全体から明らかになったプドガラ説の核心とそれを批判する側の批判の仕方などを述べるなどがなどである。

副論文の『俱舍論』『破我品』の翻訳は、すでに幾つか出されているが、最新のサンスクリットテキストを批判的に用いながら訳することがなされており、意味あるものであろう。

また、本論文は、誤字や脱字等が処処に見られ、日本語表現が不適切な所もあり、文意が不明瞭な箇所もあるので、注意すべきである。

以上のように、本論文は考察や論述の仕方、まとめ方などに不十分な点も見られるが、プドガラ説について仏教内部での対論の部分を丹念に読解し考察することを通して、犢子部・正量部のプドガラ説の内容と論拠と、それを批判する立脚点とその方法を明らかにしていることなど、幾つかの新たな研究成果も認められる。

審査に必要とされる最終試験については、審査委員全員により 2010 年 5 月 28 日に試問を行なった。その結果、審査委員一同一致して、MAYTHEE PITAKTEERADHAM に大谷大学 博士(文学)の学位を授与することが適当であると判断した。

| | | |
|-------------|-------------------------------|---------|
| 氏 名 | あお き れい 青 木 玲 | |
| 学 位 の 種 類 | 博士 (文学) | |
| 学 位 記 番 号 | 甲第 84 号 | |
| 学位授与の日付 | 2011 年 3 月 18 日 | |
| 学位授与の要件 | 学位規程第 3 条第 1 項 | |
| 学 位 論 文 題 目 | 願生道——親鸞における「果遂の誓」の意義—— | |
| 論 文 審 査 委 員 | (主査) 大谷大学教授 博士 (文学) [大谷大学] | 延 塚 知 道 |
| | (副査) 大谷大学教授 | 水 島 見 一 |
| | (副査) 同朋大学教授 | 廣 瀬 惺 |

学位請求論文審査要旨

I. 論文内容の要旨

本論文の目的は、『教行信証』「化身土巻」の「三願転入」の文において明らかにされる「果遂の誓」の意義を確かめ、そのことを通して衆生に実現する仏道の内実を尋ねようとするものである。『教行信証』「信巻」の「別序」には、「ここに愚禿釈の親鸞、諸仏如来の真説に信順して、論家・釈家の宗義を披閲す。広く三經の光沢を蒙りて、特に一心の華文を開く。しばらく疑問を至してついに明証を出だす」とあるが、一般的にはこの「疑問」は、「信巻」の「三一問答」を指すと了解されてきた。しかし筆者は「化身土巻」の「三經一異の問答」にまで通じていて、「信巻」と「化身土巻」との立体的な構造の中で願生の信心を明らかにしていると読み、「果遂の誓い」によって願生者の信心は途切れることなく生涯を全うせしめられることを明らかにしている。

目次は以下のようになる。

序論

第一章 建言我一心

第一節 『浄土論註』「讃嘆門釈」

第二節 『観経疏』「三心釈」

第三節 三一問答「信楽釈」

第四節 三一問答「欲生釈」

第五節 唯除

第二章 三經の大綱

第一節 顕彰隠密——第一問答——

第二節 顕彰隠密——第二問答——

第三章 果遂の誓

第一節 信不具足・聞不具足

第二節 善知識

第三節 果遂の誓

結論

心を推究し、そのことを通して浮き彫りになる自力執心の問題を「化身土巻」の二つの問答で推究している。したがって、「信巻」の三一問答と「化身土巻」の二つの問答は、決して別々のものではなく、むしろ、それらの問答全体を通さなければ一切衆生の救済は明らかにならない。「称名憶念有れども、無明由存して所願を満てざるは何ん」という信心の問題は、「至心信楽の願」・「至心発願の願」・「至心回向の願」という三願の仏意を了知しなければ明らかにならない、ということを結論として確かめている。

Ⅱ. 論文審査結果の要旨

第一章では、「信巻」に引用される『浄土論註』「讃嘆門釈」の文、特に、その中に示される「建言我一心」の文言を基軸として真実信心の内容を考察し、「我一心」とは、「如来選択の願心」と「大聖矜哀の善巧」という「二尊

の御はからい」によって開かれると考察している。この「我一心」は、三一問答「信樂釈」に再度引用され、真実信心が「涅槃の真因」であること、そして、その信心は如来の回向によって成り立つこと、それゆえ、如来回向の信心は涅槃に「能入」せしめるはたらきを持つことを明らかにしている。

第二章では、『大経』の「三心」と『観経』の「三心」の一異を尋ねている。さらに、『大経』と『観経』の「三心」と『阿弥陀経』の「一心」の一異という「化身土巻」の二つの問答を通して、『観経』と『阿弥陀経』の「顕彰隱蜜の義」を確かめている。この二つの問答を通して、親鸞は「三経の大綱」を「信心を彰して能入とす」と言い、涅槃に「能入」する「信心」がどのようにして衆生に成就するのかを「三経」を通して明らかにしている。

第三章では、「化身土巻」の「真門釈」を通して、親鸞における「果遂の誓」の意義を考察している。まず、『涅槃経』「迦葉品」の引文を中心に、「信不具足」・「聞不具足」という衆生の「邪見」の問題を考察し、さらに「邪見」とは、善知識に値遇し、本願に帰したにもかかわらず「罪福を信ずる心を以て本願力を願求す」という問題であることを確認している。そして、この「邪見」は、「善知識」に値遇することによって離れることができることを明らかにする。親鸞は、本願に帰したにもかかわらず、なお「本願の嘉号を以て己が善根とする」という「無始」・「無終」の仏智疑惑の身を生きる衆生を、必ず救い「果たし遂げん」とするはたらきとして「果遂の誓」の意義を見出している。換言すれば、「果遂の誓」とは、「難思議往生を遂げんと欲う」という一切衆生が共に救済される願生道を実現するはたらきであることを確認している。

結論

親鸞は、『浄土論註』「讃嘆門釈」の「称名憶念有れども、無明由存して所願を満てざるは何ん」という問いを基点とし、「信巻」において三一問答を中核としながら真実信 親鸞の仏道の原点は法然との出遇いによって第十八・至心信樂の願に立ったところにある。しかし生涯を通じて親鸞を第

十八願に帰らしめたのは、善知識の護持養育と方便の願である第二十・果遂の誓いであることを明らかにしようとしたのが親鸞の「化身土巻」の課題の一つである。したがって、「信巻」と「化身土巻」との立体的な構造を解明するなかで、親鸞の仏道の信心の力動性を明らかにしようとしたところに、本論文の独自性と優れた視点がある。

第一章の「信巻」の課題を尋ねるところでは、世親の「建言我一心」という願生の信心が善導の三心釈を通して「三一問答」へ結実していく道筋が、親鸞の思索によって丁寧に押さえられる。この点は、筆者の学問量の豊富さと思索の緻密さが窺える。「三一問答」では、「衆生の信心と如来の願心とは、別ものではない。信心と願心とは同質である」ということが、従来の諸先学の了解である。しかし筆者は、字訓釈の「涅槃の真因はただ信心を以てす」という親鸞の言葉に注目して、従来の教理学的な関心に止まることなく、信心と願心が同質だからこそ衆生の信心は如来の涅槃界にまで通じていると主張することは、親鸞の意になかった優れた了解であると評価できる。この辺に、一切衆生が本願の信によって必ず大般涅槃道に立つという親鸞の仏道観に対する筆者の指向性が窺えて、評価に値すると思われる。

「三一問答」の親鸞の記述でも明かなように、衆生が涅槃に触れるときには、必ず「穢悪汚染」という徹底した懺悔をとまなう。その衆生の問題性を「信巻」では、後半の多くを使って唯除と一闡提の問題として親鸞が展開するが、筆者もそこを丁寧に考えている。

第二章は「化身土巻」の親鸞の課題を尋ねている。『大経』の三心と『観経』の三心との一異を推究し、『大経』が明らかにする他力の信（第十八願の成就）に立って、『観経』の要門（第十九願）の方便の願としての大切さをよく尋ねている。さらに『大経』の一心と『阿弥陀経』の一心との一異を問うて「顕彰穩密」の意義を明確にする。『観経』、『阿弥陀経』は表向きには、要門、真門という方便としての大切な意義を持っているが、その深意は『大経』の他力の信心に収斂されると尋ねている。

親鸞は、この問答を終わるに当たって「今將に一心一異の義を談ぜんとす、

当に此の意なるべしと也。三経一心の義答え竟りぬ」と言うが、筆者は「此の意」とは「三経の大綱は、顕彰穩密の義有り」と雖も信心を彰して能入となす」ということを表すと言ひ、三経によって明らかにされる他力の信心は大涅槃に直結する、と結論づけている。ここも先の「信巻」の仏道観に一貫されていて、評価できるところである。

第三章は、「化身土巻」の善知識釈を、親鸞の読み替えや乃至に注意を払いながら、丁寧にさらに正確に読み込もうとしている。そして特に第二十・果遂の誓いととの関係のなかでの善知識の意義を明らかにしようと努力している。ここも筆者の思索の緻密さと学問量が窺えるところである。さらに「化身土巻」の核となる三願転入を考えて、第十八・至心信樂の願と第二十・果遂の誓いととの密接な関係に言及しながら、「今特に方便の真門を出でて選択の願海に転入せり、速に難思往生の心を離れて難思議往生を遂げんと欲う」という親鸞の表白から、果遂の誓いは第十八願の難思議往生に立ち返らせる大悲の願心であると言う。筆者は、以上の論考を踏まえて、「親鸞が「信文類序」に「しばらく疑問を至して遂に明証を出す」と述べる「遂に」とは、「果たし遂げん」とする「果遂の誓い」と呼応するものと言えよう。「涅槃の真因」と親鸞が確認する真実信心は「信巻」に止まらず、「化身土巻」の「果遂の誓い」の意義を見いだすところにまで貫かれる課題であり、そこにおいて「遂に明証を出す」のである。その意味で「難思議往生を遂げんと欲う」という願生道は、真実信心の「明証を出す」歩みとなるのであり、それは「果遂の誓い」によって徹底されいよいよ明確にされるのである。したがって親鸞における願生道とは、窮まりなき大涅槃道なのである」と結論づけている。

しかし全体に問題がないわけではない。審査で問題になった点をいくつか挙げておきたい。まず第一章の「三一問答」では、信樂釈、欲生釈だけを取り上げており、なぜ至心釈を落としたのか。また唯除の文の課題と「三一問答」の課題とがどう繋がっているのか不明確である。第二章では、三経の大綱は『大経』の一心に収斂され涅槃の真因であるというが、なぜ涅槃の真因かの論証が弱い。「三一問答」の欲生釈の回向の問題が十分に捉えられてい

ないことに由るのではないか。第三章は「三願転入」の推究に十分な枚数を割いてよく考えるべきではないか、等々の問題は残るが、筆者のこれからの課題として欲しい。これらの問題があったとしても、「信巻」と「化身土巻」の立体構造の中で、信心の力動性を捉えようとする筆者独自の視点、勉強量の豊富さ、思索の緻密さ等大変優れた論文である。

審査に必要とされる最終試験については、審査員全員により2010年12月22日に試問を行った。その結果審査員一同一致して、青木玲に大谷大学博士(文学)の学位を授与することが適当と判断した。

| | | |
|-------------|---|--|
| 氏 名 | まい ける こん う え い MICHAEL J. CONWAY | |
| 学 位 の 種 類 | 博士（文学） | |
| 学 位 記 番 号 | 甲第 85 号 | |
| 学位授与の日付 | 2011 年 3 月 18 日 | |
| 学位授与の要件 | 学位規程第 3 条第 1 項 | |
| 学 位 論 文 題 目 | 本願念仏の宣揚 ——浄土教形成過程における道綽の意義—— | |
| 論文審査委員 | (主査) 大谷大学教授 博士（文学）[大谷大学] 安 富 信 哉 | |
| | (副査) 大谷大学教授 Ph.D. [ハーバード大学] ROBERT F. RHODES | |
| | (副査) 大谷大学教授 藤 嶽 明 信 | |
| | (副査) ニューヨーク州立大学教授 Ph.D. [カリフォルニア州立大学バークレー] MARK L. BLUM | |

学位請求論文審査報告書

I. 論文内容の要旨

本論文は、中国、隋末・唐初の僧で、浄土五祖の第二、真宗七高僧の第四に数えられる道綽禅師の浄土教学史上における意義について研究したものである。構成は、六章よりなり、道綽教学の中核を本願念仏の宣揚と押さえ、浄土教の形成過程における道綽の意義、特に親鸞が指し示した七高僧の伝統における意義を明確に示そうとしている。なお副論文として、「An Annotated Translation of Daochuo's Anleji 安樂集 (A Collection of Passages on [the Land of] Peace and Bliss)」という題目のもと、『安樂集』上巻の英訳を添える。

第一章「道綽伝の考察と道綽の回心」では、伝記資料と『安樂集』の記述を考察することによって、道綽の回心の動機について論ずる。古くから、そ

の回心について、曇鸞の臨終の様子を伝える石碑によって促されたと云われてきたが、論者は、迦才の『浄土論』における道綽伝に注目し〔第一節「道綽の回心の動機」〕、また曇鸞の「吾、既に凡夫にして智慧浅短なり」(『安樂集』第四大門第一所引)という告白をもとに、回心(帰浄)が促されたと推察する〔第二節「道綽の回心の動機——『安樂集』を通して——」〕。さらにこの原体験が、聖道・浄土の教相判釈の根底をなしたと論ずる〔第三節「道綽の回心の内実——『安樂集』を通して——」〕。

第二章「『安樂集』における曇鸞教学の継承」では、道綽が曇鸞の思想をどのように受容・展開したかについて行業論と信心論の観点から考察する。まず道綽が、『浄土論』(天親著)の五念門を解釈した『浄土論註』(曇鸞著、以下『論註』)の立場を展開し、凡夫易修の称名念仏を継承し〔第一節「念仏論の継承」〕、つぎに『論註』「八番問答」を通して、道綽が「下々品の教説」(『観経』)に説かれる凡夫の念仏行について、第十八願「乃至十念」(『大経』)の成就であると開頭したことを確かめる〔第二節「『観経』「下々品」の開頭」〕。さらに天親の「一心」の告白を承けとめた曇鸞の立場に触れ、道綽が凡夫の上に実現する信心を表現する言葉としてこの語を多く用いていると指摘する〔第三節「「一心」の展開」〕。

第三章「道綽教学における末法教説の位置」では、道綽の教判論における末法論の位置を問い直す。まず『観経』興隆の時代に、称名念仏を仏道修行の中心として選択する理由を時機の問題に関連して述べていることに注意し〔第一節「『観経』の教興と末法の教説」〕、末法の教説は傍証として用いられ、道綽が「下々品の教説」を第十八願の文に織り込むことによって看取した〈本願取意の文〉が浄土門の正証として用いられたと指摘する〔第二節「聖浄の決判における末法の教説」〕。つぎに道綽の教判における末法到来の位置を明らかにするために、その輪回観と仏道観について考察し〔第三節「『安樂集』における輪回観と仏道観」〕、道綽の教判論が末法観を基点とするよりは、阿弥陀如来の本願力の有無を規準に仏道修道を捉え直し、その願力による往生を出離生死を果たす唯一の道として位置づけるものであるとし〔第四節「真

偽の決判]], さらに末法の教説の道綽における傍証的位置について確認する[第五節「道綽教学における末法の教説の位置」]。

第四章「道綽教学における本願論」では、道綽が本願の教説をその教学の中心に据えたことを明らかにする。まず、道綽の本願の捉え方が、当時の仏教界における理解と異なって衆生済度の用きに主眼を置いたことを指摘し[第一節「『安楽集』にみられる四十八願」], つぎに道綽教学の中核となる第十八願について、「十念相続」という曇鸞の深意を看破して、それが第十八願の十念を意味することを明確にする[第二節「『十念相続』を誓った第十八願」]。そして道綽の〈本願取意の文〉を手懸りに、難行道と易行道との相対的相違を捉え、往生の行が完全に仏の本願力によって成り立つことを強調していること[第三節「易行道の根源としての第十八願」], つぎに難易二道釈と三願の証という曇鸞教学における中心的釈文を第十八願の取意を含む形で再組織することによって、他力による衆生済度の原理として第十八願の位置を明確にしたと論じ[第四節「曇鸞教学に照らされた第十八願」], 最後に浄土の一門の根底が第十八願一願にあり、その願に誓われている浄土往生行が称名念仏にあることを明かしたと論究する[第五節「称名を往生の行とする根本願」]。

第五章「道綽教学における行信論」では、第四章に提示した本願論という視点から『安楽集』に説かれる多様な行業論について論述する。まず、その行業論は、本願の済度の用(はたら)きの広さを示すために包括的なものとして展開されていると指摘し[第一節「本願観による包括的行業論」], つぎに道綽が、観仏や称名などの諸行に簡んで、念仏一行を、「要門」(往生に不可欠な契機)と位置づけ[第二節「諸行と念仏との廃立」], その上で道綽が、称名念仏を時機相応の行業と位置づけた理由が、名号に内包される功德の用きによるとみた点にあると述べる[第三節「他力の持つ行」]。最後に、道綽が『安楽集』撰述の目的について、「信を勧め、往を求めしむ」ためであると述べたことに注意し、その信に他力的色彩が濃厚であると指摘する[第四節「他力の用きとしての念仏の信」]。

第六章「善導教学への影響」では、道綽から善導への思想的継承について論ずる。まず『大経』所説の本願に立って『観経』を捉える道綽の姿勢が、善導の「古今楷定」に受け継がれたと指摘する〔第一節「本願に立脚した『観経』観の共有」〕。つぎに善導の弘願と要門の廃立が、『安楽集』（第一大門第一）において、暗示されていると論じ〔第二節「念観廃立の根拠」〕、両祖師の〈本願取意の文〉の比較を通して、善導が道綽と同様に称名念仏を本願に誓われた行と位置づけたことを明らかにする〔第三節「本願取意文における本願論・行業論の継承」〕。

Ⅱ. 論文審査結果の要旨

「真宗七祖のうちにおいて、道綽は注目されることがもつとも少ない」（野上俊静『中国浄土三祖伝』）といわれる中で、論者は道綽出現の意義を改め問う。主題は、「本願念仏の宣揚」である。この視点から、従来の道綽論の基本的性格の問題点を考察する。すなわち『観経』の要義釈と見られてきた『安楽集』を、論者は『大経』開頭の書と見て、とくに『大経』第十八願と『観経』「下々品」の教説を合体した〈本願取意の文〉に注意し、本願論の観点より考察する。

構成については、第一章から第六章まで、一貫したテーマのもとで順序よく展開している。各章は、バランスがよい。緒言ではじまって、小結を置いている。全体を六章に分け、節も細かく分けて、論点を明確にし、読みやすい日本語で、論旨も明快である。巻末の「参考文献資料表」に明らかのように、先行研究にもよく目を配っており、研究の成果をみることができる。

以下、本論文の成果と問題点を指摘したい。

第一章で論者は、道綽の出発点の回心の問題を取りあげ、多屋弘氏の説（『曇鸞大師伝之研究』）を承けて、玄中寺の碑文が記す「嘉瑞」によって回心した（『続高僧伝』）との伝承に疑問を呈し、迦才の『浄土論』、『安楽集』自体の文脈に沿って回心の内実を尋ねる。就中、曇鸞が仏道修行に耐え得ないと「吾」が身の事実を告白した事蹟を引用した一節（第四大門第一）に注意

する。その観点は、重要である。ただ、これに言及する問答の一節の内容からすると奇瑞は看過できない。現代人の感覚から奇瑞の意義を軽視することには考えるべき点が残る。

第二章で、論者は曇鸞教学の継承の問題を取りあげ、とくに『論註』『八番問答』を中心に、『安楽集』との呼応的展開の関係について綿密に裏付けている。また近年、道綽の行の理解が重視され、その信の了解について議論がされてこなかったとの説(岡亮二「中国三祖の十念思想」二)に留意し、信心論を「一心」の側面から追究しているのは了解される。同時に、曇鸞は、なぜ称名しているのに無明が残るか、という問いを出し、「三不信」(信心の不淳、不一、不相続)をその理由に挙げ、これを道綽が承けている点もさらに考慮されるべきであろう。

第三章では、末法観の問題を取りあげ、道綽の末法論は、「本願念仏の宣揚」の傍証であったとし、末法だから念仏しかないという浄土教観が道綽の教判として通有しているが、道綽は、そのような観点をそれほど強調しておらず、力強い論証の仕方では、本願を普遍原理として提示しているとする。『安楽集』の論法は、聖道の論理を用いて浄土門への帰入を呼びかけた(「准通立別」といわれるが、それと対比するために、本章では、末法がそれほど重視されないという独自の論点を提出し、興味深い。ただ、末法思想を二次的だとする見解は、本書の後世への影響、次章の時機相応の論考からするとさらに論証を要する。

第四章では、本願論を扱う。本章は、この論文の主題からしても、第五章とともに中心となる。論者は、道綽が「下々品の教説」を第十八願の文に織り込むことによって看取した〈本願取意の文〉が浄土門の教判の正証として用いられたと指摘する。道綽は、自由自在に聖教を書き換えているが、その仏典の引用の仕方については、すでに先学により、恣意的であるとして問題が提起されている(津田左右吉『シナ佛教の研究』第一篇)。仏説に対する道綽の柔軟な姿勢は、善導への影響もあり、さらに考察する余地がある。また、四十八願にほとんど言及しない同時代の註釈書(浄影寺慧遠『観無量寿経義疏』

二卷、嘉祥寺吉蔵『観無量寿経義疏』一卷)などにも同時に眼を配る必要があろう。

第五章では、道綽における称名一行の扱ひを、「廃立」という法然の用語で説明し、他方で道綽の行業論を「包括的」と表現する。この二つの見方がいかなる意味で両立するかは、さらに論証が必要であろう。また「行信」という親鸞の用語で、念仏と信心の関係を考察することにも配慮が必要である。ただ、本書撰述の目的を、「勸信求往」と述べた道綽が、行業論の多様さに較べて、信心の内容への言及が少ないこと、にもかかわらず、信を宣揚した先達として親鸞が「三不三信誨慰勸」(「正信偈」)と、その功績を讃えたことについて論究し、道綽の立場が、念仏と信心の不可分を説くところにあるとする洞察は鋭い。

第六章では、善導教学への継承について、『安楽集』の念仏思想は、念仏と観仏が不分明である(「念観未分」)、あるいは要門と弘願門が混同されている(「要弘奄含」)という、近世以来の宗学の見解がある(東陽円月『安楽集略解』、ほか)が、論者は、道綽が、善導のように諸行を廃して念仏を立てるという二行の廃立を明言はしないものの、「念観廃立」の立場にあると、一貫して論ずる。道綽が時代的制約のため随他誘引の不徹底な立場に留まった、という通念的理解を打破しようとする論者の意図はよく了解できるが、道綽と善導の同質性を論ずるため、両者の差異の局面についての考察が今後の課題として残されている。

以上、各章の問題点の一斑について触れてみたが、「本願念仏の宣揚」という明確な主題をもつ本論文において、論者は、『安楽集』の研究を、たんに学解的立場に終らせず、道綽自身の行証の立場を重視して考究し、論述している。そこに実存的関心に立った真宗学の方法論が一貫している。

ただ、論考をさらに総合的に展開するためには、同時に、他の研究領域にも考察の幅を拡げることが求められる。たとえば『安楽集』撰述の時代環境として、聖道門を主な対象とするという対他的な側面(「准通立別」)が大きい。道綽の言説世界(speech community)がどのようなものであったかの解

明は、本書執筆当時の対読衆（読者層）を見定める上で、大切な意味をもつ。本書には、民間信仰に密接した偽経（疑偽經典）からの引用が多い（参照、大内文雄『『安樂集』に引用された所謂偽經典について』『大谷学報』五三・二）と指摘されるが、この点に視野を拓けることも、対他的な側面を考察する一助になるのではなかろうか。

いずれにせよ本論文は、先行研究を丹念に渉猟した上で、独自の視点から『安樂集』の浄土教史上の意義を考察した研究であり、学界に資する成果も見られ、課程博士の学位を授与する水準に達していると認められる。

なお、本論文について、2010年12月16日、審査委員全員により試問を行った。その結果、審査委員一同一致して、マイケル・コンウェイに大谷大学博士（文学）の学位を授与することが適当と判断した。

| | |
|-------------|-------------------------------------|
| 氏 名 | 楠 宏 生 <small>くすのき こう しょう</small> |
| 学 位 の 種 類 | 博士 (文学) |
| 学 位 記 番 号 | 甲第 86 号 |
| 学位授与の日付 | 2011 年 3 月 18 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規程第 3 条第 1 項 |
| 学 位 論 文 題 目 | 説一切有部における得・非得の研究 |

| | | |
|------------------|--------------------------|---------|
| 論 文 審 査 委 員 (主査) | 大谷大学教授 | 宮 下 晴 輝 |
| (副査) | 大谷大学教授 博士 (文学) [大谷大学] | 兵 藤 一 夫 |
| (副査) | 同朋大学教授 | 福 田 琢 |

学位請求論文審査報告書

I. 論文内容の要旨

本論文は、紀元前後から五、六世紀頃にかけて、仏教教義学のなかで広汎かつ詳細な議論をきわめた説一切有部の教義学を研究したものである。そのなかでも、五世紀頃の『俱舍論』にいたって激しく批判され、註釈者たちの間で議論の応酬があり、中国日本の法相宗にまでその議論が及んだ最も難解な教義概念の一つである「得・非得」をとりあげたものである。

仏教において「法」(dharma)の概念は、仏陀釈尊以来用いられてきたものであるが、仏教の基本テーマである「苦」とその原因を指して「諸法」と呼ぶのが最初の用例であろう。さらにその苦の消滅である涅槃やそれをもたらす智慧などもまた「法」と呼ばれている。すなわち、生活経験の中で苦の生起と消滅に関わるものがすべて、諸法の名のもとに意味づけしなおされ、それらが真に実在するもの(諦 satya)と見なされた。

やがて教義学の展開につれて、「諸法」を構成しているものが分析整理さ

れた。説一切有部の教義学では、法の性格定義にもとづき諸法の包摂関係を精査し、諸法の数を縮減し、諸法を五種(五位)に分類した。それは、色・心・心相応行・心不相応行・無為というものである。そしてその分類概念のもとに諸法を配分し、総数をほぼ七十五ほどに限定した。

このなかで「心相応行」と分類される諸法は、心と連合する諸法という意味であり、心の生起とともに同時に生じている情念や意志などのさまざまな心の働きである。また「心不相応行」と分類される諸法は、心の働きそのものではなく、しかも直接知覚されるものではないが、心の生起に深く関わって存在しなければならないと考えられている諸法である。その代表が「得」あるいは「非得」という法であり、あるいは法が刹那に生起し消滅することを成り立たせている「生・住・異・滅」という四つの法の作用などが、そこに分類されている。この「心不相応行」に分類される諸法の実在性を主張するところに、説一切有部の教義学の一大特色があるということができる。

ここで取り上げられる「得」や「非得」は、諸法を「獲得すること」「所有すること」あるいはその反対を意味する概念であり、それ自身また実在する法であると考えられている。従来の研究において、どういう理由でこのような教義概念が成立することになったのかが論じられてきたが、しかしこの概念の特殊性ははまだ十分に解明し尽くされてはいない。したがって本論文は、改めてこの教義概念の成立過程にまでさかのぼり、複雑な展開過程を諸資料に則しながら、再整理して考察しようとするものである。

本論文の構成と内容は次のようである。

序

第一章 説一切有部の心不相応行論

第一節 心不相応行の概念

第二節 心不相応行法の変遷とその展開過程

第三節 『婆沙論』における心不相応行法

第四節 『順正理論』の和合性について

第二章 得・非得

第一節 『集異門足論』『法蘊足論』における得について

第二節 『識身足論』『成就蘊』における成就・不成就の問題

第三節 非得の定立をめぐる議論

第四節 異生性と非得

第五節 有部論書における離繫得の定立過程

第六節 有部教義学の術語概念としての得・非得

第七節 四種の得と得の得

結 語

副論文 『阿毘達磨俱舍論』根品「得・非得」とその諸註釈の翻訳研究

第一章では、「心不相応行」という分類概念そのものが、説一切有部の教義学の中で、どのように成立していったのかを検討している。説一切有部のそれぞれの論書のなかで、「心不相応行」として分類されることになる諸法がどれだけのよう列挙されているのかを確かめ、問題の「得」「非得」という法が成立するにいたるまでに、論書間でどのような時代区分が考えられるのかを検討している。

第一段階として、『集異門足論』から『品類足論』までは、非得がなく、三種の得（事得・依得・処得）を立て十六種の法を数える。第二段階は、『甘露味論』において、同じく非得がなく、三種の得が立てられ、新たに凡夫性（異生性）が加えられ、十七種の法を数える。第三段階は、三種の得がリストからはずされ、凡夫性が加えられた十四種の法を数え上げる心論系の論書、凡夫性に代わって非得が加えられ十四種の法を数え上げる『入阿毘達磨論』『俱舍論』、さらに和合性を加え十五種の法を数え上げる『順正理論』がある、と要約し論じている。

『発智論』『婆沙論』では、心不相応行を主題として法を列挙していないが、論書の成立時期は第二段階と第三段階の中間に位置している。『発智論』は「異生性」の概念を規定するために「非得」の概念を導入し、『婆沙論』はさらに、

「得」と「非得」の概念の密接な相関関係を意図して、「非得」の概念のもとに「異生性」を包摂するにいたる、と論じている。

第二章では、心不相応行法の展開過程にしたがって、有部教義学の個々の論書における「得」「非得」の概念の用例、およびそれらの概念の成立に関わった諸概念の研究が綿密に行なわれている。

まず第一節では、『集異門足論』『法蘊足論』における「得」の概念の用例として、「道果の得」を論説する箇所を取りあげ検討し、「得」の同義語として用いられる「獲」「成就」について考察し、第一段階、第二段階から第三段階のはじめまで、「得」「非得」の概念の代わりに専ら用いられた「成就」「不成就」の概念の用例を検討している。

つぎの第二節では、『識身足論』第六章「成就蘊」に説かれている「成就」「不成就」の概念について検討している。心を、善・不善・無記、欲・色・無色界繫、あるいは学・無学心と、すべての心を十二種に分類し、それら相互の成就・不成就の関係を網羅的に区分し、それにどの補特伽羅が該当するかを論ずるところである。『識身足論』全十六巻中の最後の四巻に相当し、分析区分をきわめたアビダルマの典型的な論説部分であり、心のすべての事態を「成就」「不成就」という概念のもとで論じ、さらにはある事態の開始を表わすために「捨成就、得不成就」あるいは「捨不成就、得成就」という新概念をも導入している。特に「善心の捨成就、得不成就」は断善根の時を、「不善心の捨不成就、得成就」は善根の続起の時を表わし、さらにまた煩悩の「已断」「未断」という事態をもこの「成就」「不成就」という概念で表わそうとしていることが、明らかにされた。

第三節では、まず初期論書中での「依得・処得・事得」という「三種の得」の用例を調べ、三種の得は「衆同分と密接に関わる概念であり」、「異生を定義する原理として立てられ」、「異生法の獲得という働きをもつ」という先行研究の説を再検討している。本論文は、衆同分の概念は衆生の類似性を表わす概念であり、三種の得が意味する「獲得」を意味するものではないこと、また、異生の概念が法として確定していくのは、『品類足論』の「異生法」

及び『発智論』『婆沙論』の「異生同分」「異生性」という概念の成立を待たなくてはならないと論じ、三種の得は有情身体の相続開始の「獲得」を意味するとする。

第四節では、『品類足論』の「異生法」と、『発智論』『婆沙論』の「異生性」についての議論を取り上げている。「異生性」は、『発智論』から用いられた概念であり、「聖道の非得」と定義されている。ここに導入された「非得」の概念は、聖道の非得に限られているが、やがて『婆沙論』において、「得」と「非得」というように、両者の相関関係をもって、諸法一般の獲得が論説されていくことになる。

第五節では「離繫得」が取り上げられる。煩惱の断によって得られた択滅という事態が「離繫」と呼ばれる。その択滅は、世間道によっても出世間道によっても得られる。どの道によって得られたとしても、択滅そのものは無為無漏である。しかし世間道によるものと出世間道によるものととの区別はどのように立てられるか。そこで、離繫の得を、道の有漏無漏によって区別することになる。

第六節では、完成した教義学の中で「得」「非得」という教義概念がどのように定義されているか、そしてそれがどのような問題をもつものであるのかを、特に『俱舍論』を中心にして論じられている。『俱舍論』は、『婆沙論』における「得」の議論をきわめてよく整理した上で、それがはらむ問題性をするどく指摘し、結局、説一切有部が主張する「得」の実在性を反駁する。それに対して衆賢の『順正理論』は再批判を展開する。

第七節では、「得」の議論の中でもう一つの難関である「得得」(隨得)の問題と「法後得」の問題が取り上げられている。有部は、一つの法が生ずれば、そこには、本法と得と得得という三つの法が同時に生ずるとする。得得のための法を他に立てず、本法の得が本法と得得の二つの獲得を保証するとして、三つまでに限定する。しかし法そのものが消滅しても、得法だけが「法後得」として生じ続けるとする。三つの法にはそれぞれ法後得があり、それにもまた法後得があり、無窮に増大し続けることになる。説一切有部

は、それは煩悩の断の困難さを語るものであり、また刹那刹那にすべてが生じ滅するのだから、難点はないとする。

Ⅱ. 論文審査結果の要旨

本論文は、説一切有部の「得」「非得」という教義概念を論じようとするものであるが、その概念の成立の背景を明らかにするために、「心不相応行」という分類概念の成立の問題から始めている。それが本論文の第一章である。概念の成立過程を三段階に時代区分したうえで、「三種の得」から「異生性」へ、「異生性」から「非得」へという教義概念の変遷が窺われることに注目している。また第一章の考察から、「得」「非得」という教義概念が確立するにいたるまでに、どのような問題がどのような方向で議論されてきたのかを概観することができ、特に本論文の関心の中心が、「非得」の概念の成立過程にあることが了解される。

したがって、第二章以降は、論すべき諸概念が、時代を追って、各論書の中で調査され考察されている。中でも「三種の得」や「異生性」の概念について多くが論じられ、先行研究の再検討がなされている点、評価に値する。

また、従来の研究ではあまり注目されなかった『識身足論』の「成就蘊」を取り上げ、その議論の位置や論説目的を明らかにしようとしたこともまた、大いに評価できる。しかしまだ十分に明らかになったとはいえない。有部教義学のなかで特別の位置をもつ『識身足論』全体を考察し直すなかで再論すべきであろう。

本論文は、「得」「非得」に関連する議論のほとんどを取り上げようとしたものであるが、第二章の最後に取り上げられている『俱舍論』における議論は、有部の教義学批判という観点から、別の章立てにして論すべきであったように思う。前半の概念の成立過程に考察が集中したこと自体は評価できるが、『俱舍論』の議論が紹介程度にとどまったのは残念である。

しかし、副論文において、『俱舍論』のサンスクリット原典の翻訳と、ヤショーミトラの注釈書 *Sphuṭārthā* とが翻訳され、さらにスティラマティの注

釈書である *Tattvārthā* のチベット語訳テキストからの翻訳が添えられている。特にスティラマティの注釈書のチベット語訳テキストは難解であるにも関わらず、「得」に関する部分が初めてすべて翻訳されたことは、特別に評価されてよい。

審査に必要とされる最終試験については、審査委員全員により 2010 年 12 月 9 日に試問を行なった。その結果、審査委員一同一致して、楠宏生に大谷大学博士（文学）の学位を授与することが適当であると判断した。

| | | |
|-------------|--|---------|
| 氏 名 | 宮 本 浩 尊 | |
| 学 位 の 種 類 | 博士（文学） | |
| 学 位 記 番 号 | 甲第 87 号 | |
| 学位授与の日付 | 2011 年 3 月 18 日 | |
| 学位授与の要件 | 学位規程第 3 条第 1 項 | |
| 学 位 論 文 題 目 | 中観学派と瑜伽行学派の対論とその意義 ——『般若灯論』第 25 章を中心として—— | |
| 論文審査委員 | (主査) 大谷大学教授 博士（文学）[大谷大学] | 兵 藤 一 夫 |
| | (副査) 大谷大学教授 | 宮 下 晴 輝 |
| | (副査) 大谷大学教授 | 福 田 洋 一 |
| | (副査) 滋賀医科大学教授 博士（文学）[広島大学] | 早 島 理 |

学位請求論文審査報告書

I. 論文内容の要旨

本論文は、『中論』に対するバーヴィヴェーカの注釈『般若灯論』第 25 章において展開されるバーヴィヴェーカの涅槃論と涅槃に対する見解の相違を契機にした瑜伽行学派批判、特に三性説批判について、アヴァローキタヴラタの複釈『般若灯論広註』を読解した上で考察したものである。そして、この考察を通して、バーヴィヴェーカの思想的特徴の一端を明らかにすると共に、中観学派と瑜伽行学派の思想的関係性についての新たな視点を提示しようとする。本論文の構成は次のようである。

問題の所在

第一章 中観学派の涅槃観——涅槃の無自性性論証——

1-1. 『般若灯論』第25章の著述意図

1-2. 涅槃観の確立

1-3. 修道の果報としての涅槃

1-4. 勝義諦の特質と仏陀観

1-5. 涅槃獲得の流儀

第二章 涅槃への道程——瑜伽行学派批判の考察——

2-1. 瑜伽行学派批判の争点

2-2. 勝義諦への道程——遍計所執性批判——

2-3. 勝義諦における存在論——依他起性批判——

2-4. 勝義諦における知識論——円成実性批判——

結論

副論文(『般若灯論広註』第25章のチベット訳校訂テキストと和訳)

第一章では、バーヴィヴェーカの涅槃の無自性性を論証する仕方、涅槃の獲得の方法等が明らかにされる。バーヴィヴェーカは、涅槃という概念の無自性性を論証するために、無自性論に相對する有自性論に基づいた涅槃観を批判する。その時、彼は、二諦説に基づいた議論の枠組みを設定して論争を展開している。すなわち、バーヴィヴェーカは、世俗諦において、存在に対して一定の存在性を是認する一方で、勝義諦においては、すべての存在が無自性であることを論じるのである。このような彼の涅槃観は、『中論』第25章第3偈によって保証されるものである。また、対論者の「涅槃が存在しなければ修行者の努力は徒勞に終わるので、修道の果報としての涅槃は存在する」との主張に対して、バーヴィヴェーカは、『中論』第25章第19偈、第20偈に基づいて批判する。その時に注意されるのは、法性という概念である。同第19偈において、ナーガールジュナは、輪廻と涅槃には区別が存在しないと主張し、同第20偈においては、輪廻と涅槃は究極において区別が存在しないと主張している。バーヴィヴェーカは、この「究極」という概念と、法性、真如、空性などを同義語として理解し、これらの概念を勝義諦に

おける不二論と関連づけるのである。

次に、バーヴィヴェーカは、『中論』第25章第24偈に対する註釈において、勝義諦の特質と、仏陀の教説について議論する。その時に問題になるのが勝義諦（涅槃）を獲得する方法論である。『広註』は、中観学派による勝義諦獲得の方法論が『中論』第18章第5偈と第7偈に説かれていると指摘しているので、『広註』の記述に沿って、バーヴィヴェーカによる『中論』第18章第5偈と第7偈に対する理解の内容を確認する。バーヴィヴェーカは『中論』第18章第4偈には声聞乗・独覚乗に共通した煩惱障の断滅が説かれており、同第5偈には大乘独自の所知障の断滅が説かれていると理解する。そして、この所知障を断じる具体的な手だてとして、同第7偈を位置づけるのである。

バーヴィヴェーカは、同第7偈において、同第5偈cd句に説かれた戲論の寂滅が、心の対象領域を滅することによって獲得されると理解する。彼は、心の対象領域として、認識対象のみならず、認識の主体である心を含め、認識対象と心を共に退けることによって、無分別智が獲得されると主張する。その無分別智は、真実・真如を対象として持つものであるが、それは、分別知が対象を認識するような仕方ではなく、「見ないという仕方で見ると」という逆説的な形でのみ表現することが可能なものであるとする。このような無分別智の観点からすれば、仏陀や仏説等を含めてすべてのものは真実として存在し得ないことになる。

第二章では、バーヴィヴェーカによる瑜伽行学派批判の内容が考察される。この批判は、『中論』第25章第24偈a句に「あらゆる認識が静まる」と説かれている意味内容をめぐる論争である。瑜伽行学派は、その意味を円成実性が実現した状態として理解し、それを実現するための所依である依他起性が実有であるとして、中観学派は依他起性を損滅していると批判するのである。

バーヴィヴェーカは、この論争において、瑜伽行学派の中心的思想である三性説と、それらの無自性性に対して批判の矛先を向ける。その際に彼は主として『顕揚聖教論』に基づいて瑜伽行学派の三性説を捉えた上で批判を

展開していく。

その中、遍計所執性に対する批判に際しては、「構想されたもの」という概念が問題とされる。バーヴィヴェーカは、瑜伽行学派が遍計所執性を依他起性である諸法を名称によって分別されたものとして世俗と勝義において存在しないと理解していると捉える。これに対して、彼は遍計所執性を言語表現として理解し、それを二つに区別して議論を展開する。すなわち、例えば、「繩」を「蛇」と誤認した言語表現に対しては、バーヴィヴェーカは世俗諦としても「蛇」の存在を否定するが、「蛇」を「蛇」とする言語表現は、世俗諦としてその存在を是認するのである。ここでの言語表現とは、内的な思考（意言）と外的な発言（語言）を合わせたもので、戯論と同義であるとされる。第一章において確認したように、バーヴィヴェーカは、『中論』第18章第5偈と第7偈によって、空性において戯論を減することによって勝義諦への悟入、あるいは涅槃の獲得に至ることができると考えている。すなわち、言語表現を寂靜にすることで、涅槃の獲得に至ると考えるのである。

次に、バーヴィヴェーカは、依他起性を批判する。彼は、瑜伽行学派が勝義として依他起性の実有を主張する点を批判する。第一章において確認したように、バーヴィヴェーカにとって法性、涅槃、真如、究極は、「認識されない」という観点から同義語と見なされ、勝義不二論を保証するものとされる。勝義不二論とは、換言すれば、勝義としては区別は存在しないということである。しかし、勝義として依他起性を認めた場合、因と縁という諸法の区別を是認するということになってしまう。そのため、バーヴィヴェーカは、勝義において不生、不二を主張し、勝義として、雑染と清浄の二を認める瑜伽行学派を痛烈に批判するのである。

最後に、バーヴィヴェーカは、円成実性を批判する。瑜伽行学派は、円成実性を無分別智と真如との関係として理解し、両者に所取と能取の関係を認めようとする。これに対して、バーヴィヴェーカは、不二論の立場から、無分別智と真如との関係を所取と能取の関係として理解する態度を批判するのである。第一章において確認したように、バーヴィヴェーカにとって、無分

別智と真如との関係は、不二の関係として認められる。このようなバーヴィヴェーカの理解は、彼による「勝義」の語義解釈にも認められるものである。すなわち、バーヴィヴェーカにとって、無分別智と真如との関係は、勝義として不二であり一味であると言えるのである。

以上の考察によって、バーヴィヴェーカの瑜伽行学派批判は、涅槃を獲得するための方法論、及び勝義諦におけるあり方をめぐる論争として位置づけることができるであろう。そしてこのように位置づけることにより、「涅槃の考察」と名づけられた『般若灯論』第25章の末尾に、瑜伽行学派との論争が提示されている背景も明らかになるのである。

Ⅱ. 論文審査結果の要旨

本論文は、『中論』に対するバーヴィヴェーカの注釈『般若灯論』の第25章とそれに対するアヴァローキタヴラタの複釈『広註』を丹念に読解した上で、バーヴィヴェーカの涅槃観や涅槃へ至る方法論を明らかにし(第一章)、彼がそこで展開する瑜伽行学派批判の意義を考察しようとする(第二章)ものである。この中、第一章におけるバーヴィヴェーカの涅槃観と涅槃に至る方法論については、『広註』の読解に基づいて論じられており、勝義としては涅槃は無自性であること、世俗としては涅槃を獲得するという事象を認めること、涅槃に至る方法は『中論』第18章第5偈と第7偈に基づくこと、すなわち無分別智は認識対象と認識主体(心)を共に退けることによって獲得されること、その無分別智は真如を対象として持つものとも表現されるが分別知が対象を認識するような関係にあるのではなく、「対象を見ないことが真実の見である」という逆説的な表現でのみ表現可能であることなど、これまで明確にされていなかった点を指摘していることは評価できる。

第二章の瑜伽行学派批判については、『般若灯論』第25章の当該部分の議論をたどりながらバーヴィヴェーカの瑜伽行学派批判の論点を整理していることは評価できるが、内容の要約に止まった感があり、考察が不十分な点が見られることは残念である。バーヴィヴェーカの瑜伽行学派批判について

は、主に彼の主著『中観心論頌』（その注釈『タルカジュヴァーラ』を含む）第5章をはじめ、『般若灯論』第25章や『大乘掌珍論』に説かれているが、それらに関する重要な先行研究である山口益博士や安井広済博士などの所説をもう少し批判的に取り込んで論ずれば、考察はより深まったのではないかとと思われる。一方で、バーヴィヴェーカの批判する瑜伽行学派の三性説が『顕揚聖教論』に基づいたものであることはすでに指摘されているが、そのことをさらによりはっきりと『顕揚聖教論』の文脈の中で確かめようとしていることなど新たな面も見られる。このことは、バーヴィヴェーカが瑜伽行学派の三性説をどのように理解しているかを確かめるための重要な作業であり、本論文ではなお不十分なところが見受けられるのでさらに厳密な検証が必要であろう。また、部分的ではあるが、バーヴィヴェーカの瑜伽行学派批判のもう一つの重要なテキストである『大乘掌珍論』と関連づけて考察していることも本論文の新たな面として評価できる。『大乘掌珍論』は難解なためこれまで十分にに取り上げられていない著作であるが、本論文は幾つかの箇所でのこの文献と関連させて言及している点は、今後の研究の方向を示すものとして期待できる。

また、副論文として、アヴァローキタヴラタの『般若灯論広註』第25章のチベット訳校訂テキストを作成し、その和訳をしていることは本論文の基礎作業として意義あるものである。特に当該部分の翻訳は、訳語の不統一や意味の不明瞭・誤解なども見られるものの、本論文におけるものが最初の和訳であり評価できる。

以上のように、本論文には考察や論述の仕方などに問題点や不十分な点も見られるが、全体としては、『般若灯論』とその『広註』に基づいてバーヴィヴェーカの涅槃観、瑜伽行学派批判について幾つかの新たな研究成果が認められる。

審査に必要とされる最終試験については、審査委員全員により2010年12月21日に試問を行なった。その結果、審査委員一同一致して、宮本浩尊に大谷大学博士（文学）の学位を授与することが適当であると判断した。